

学校だより

在マレーシア日本国大使館附属・
クアラルンプール日本人会日本人学校
平成28年度 第11号(3月15日発行)
URL : <http://www.jskl.edu.my>

必然

校長 宮谷 真一郎

先日3月1日には中学部48名、そして、昨日3月14日には幼稚部46名、小学部79名が、無事、巣立ちました。幼稚部のみなさん、ご卒業おめでとうございます。小学部、中学部のみなさん、ご卒業おめでとうございます。そして、ここまで温かく見守り、励まし、お育てなされた保護者の皆様、心からお祝い申し上げます。

ところで、皆さんは漢詩という文学を知っていますか。

決まった文字数や行数によって、その時々的心情を表現します。決まった形式で表現するという以外に、すべて漢字で書くというのもその特徴です。その様相はまるでパズルのようです。整然と並ぶ漢字ではありますが、漢字—文字—文字にそれぞれの意味があることから、できあがった漢詩はまるで一枚の絵のようです。私は漢詩でも中唐の詩人李白(りはく)の作品が好きです。その作品の中に「黄鶴楼(こうかくろう)にて孟浩然(もうこうねん)の広陵(こうりょう)に之くを送る」をいうものがあります。

互いの才能を認め、それぞれに敬慕の念を抱きながらも、決して出会うことのなかった李白と孟浩然。ところが、運命であり、必然であったのでしょう。孟浩然は就職先を求めての途上で、李白は詩作の旅中で、偶然にも黄鶴楼で出会ったのです。景勝地であり、芸術を探求するものにとって聖地とも言うべき黄鶴楼で、李白と孟浩然は会い見え、唐という国の将来や文芸界について、夜を徹して熱く語り合いました。そして、いよいよ孟浩然が広陵に下る朝。その別れを惜しんだ李白は、別離の情を断ちがたく、いつまでもいつまでも孟浩然の乗った舟を見送りました。その時に創った詩がこの作品です。

志同じくする仲間が偶然にも出会い、そして、国の未来や自分の理想について語り合う。千年以上も前、中国での話とは思えないほど、今の私たちには共感できる作品です。「出会いに偶然などなく、それは全て必然である」とある哲学者も述べています。彼らが後世に残した偉業を垣間見るにつけ、まさに首肯できるものです。

開校した五十年前、当時の皆様が夢見た「将来」が「現実」のものとなっているかどうか。その答えを、教職員と保護者の皆様と学校運営理事会の皆様とで育ててきた、巣立ちゆく皆さん自身が、その姿で示してくれました。「夢は叶った」と納得していただける姿だと確信します。

国や時代、そして社会の様相など、様々に移り変わるのが世の中です。それは、人が人としての幸せを手に入れようと生きるからです。しかし、変わりゆく世の中でたった一つ変わらないもの、変えてはならないもの。それが、「一期一会」の心です。

出会えば、いずれ「別れ」は必ずやってきます。そのとき、相手へ心からの賛辞を送り、相手のこれからの幸せを願える自分自身になりたい。だから、出会いに「感謝」し、その瞬間瞬間を懸命に生きるのです。そうすれば、必ず李白と孟浩然のように「必然」を引き寄せる力が身につくと思います。

例え暮らす場所が違い、生きる時間に差があっても、それぞれの地において、共に同じ方向を向いて歩いていく仲間として、これからも応援します。皆さん、出会ってくれて、ありがとう。